HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キリスト論 ： ラーナーにおける超越論的キリスト論
Author(s)	荒木関, 巧
Citation	基督教学, 11, 23-24
Issue Date	1976-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46322
Type	journal article
File Information	11_23-24.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究会発表要旨

キリスト論
ラーナーにおける超越論的キリスト論

荒木関巧

ラーナーとツッシングは教義学、聖書学の立場からキリスト論の教科書の共同作成を試みている(K. Rahner-W. Thüsing, Christologie-Systematisch und Exegetisch, Freiburg, 1972)。ラーナーの思想をキリスト論の基本前提として認めることができる。

一、「イエスに対する信仰」の場としての「教会の信仰」

ラーナーは第一前提として、実際に私達が持っているキリストへの信仰という現象をあげる。キリスト論はキリスト信仰の現象論から出発する。信じられ、体験され実践され、宣教されてきた教会信者達の信仰を出発点とする。かれらの信仰現象から信仰そのものについての問いが生まれ、イエスそのものについて(Sache Iesu)問いが発せられる。①今までイエスをどのように理解してきたか、その変遷を理解することによって、②イエスそのものについて考察し、③更に私達にとって、イエスはどう意味しているか考察するのである。①を重んじるのは、主観的、個人的考えによって消されてしまわないように、根源的価値を共同体組織が維持しているためである。初代教会の宣教内容、信条を通じて、イエスを教会の信仰の光のもとに理解し、解釈する。聖書には種々のキリスト論があるが、絶対的救済者イエスへの信仰という点では、皆一致している。そのような生活の座において、即ち信仰実践の場、教会共同体において、新約聖書の証言を理解しなければならない。

しかし教会的信仰はその限界をわきまえていなければ、制度組織を強調し、イエスのかわりに教会が中心になり、キリスト論が教会論を保証する付随的なものになりさがる危険もある。

二、人間精神の超越性

ラーナーはカント以来の西洋的思惟の影響に立ち、人

間理性を重んじ、人間の完成を精神の飛躍に見る。人間精神は無限なるものに向かって飛躍する構造を持っており、この構造をみたすのはキリストという理想像（イデー）である。

認識行為と自由において自己超越し、外的対象を越え、神秘なるものへと飛躍する。この神秘が人間の存在の充実のために与えられることを希望する。もし与えられるなら、自由をもって受容が拒絶かを決断する。そのとき人間は人間として完成する。いつ、この絶対的秘義が与えられるかという歴史における神の介入が問題になるが、ラーナーは介入前の人間の受け入れ状態を考察する。人間は絶対的秘義の自己譲与に対して開かれている。このような人間の超越論的構造を超自然的実存規定(potentia obedientialis)とよぶ。

人間が深く求めているものはイエスにおいて見出され、みたされる。イエスを知る・知らずに関係なく、人間はみなイエスに向けられている(anonymen Christologie)。人間は実存構造において、すでにキリストとの関係の中にある。宣教はこの関係を明白にさせ、現実化する。信仰によって、キリストとの関係は現実化し、キリストは人間にとって、救いとして現・存(da-sein)するものとなる。このようにすでにキリストと結ばれている関係を超越論的キリスト論 transzendentale Christologie とよぶことができる。又キリストを理想像として人間精神が求めている点で、キリスト論を人間論の自己超越とよびうるのである(Christologie als sich selbst transzendierende Anthropologie)。

人間精神の超越性を強調しすぎると、一回かぎりの史的実存としてのイエスの重みを忘れる危険がある。イエスの派遣と、かれによって形成された共同体の歴史的重みを忘れる危険がある。人間は一人では人間ではない。我・汝・我々という人格共同体関係において人間は存在する。ラーナーの超越論的キリスト論を受けいれるためには、歴史的かかわりあいが忘れられてはならないのである。その点で、すでにラーナーが第一前提として教会の信仰証言をあげていることが理解されるのである。

ラーナーのキリスト論は下から上への上昇のキリスト論の前提となる人間論であり、この前提をふまえて、父から子へ、子から父への関係のキリスト論、聖書的キリスト論が出発しなければならないのである。